

私にとっては、小中学校時代の給食といえ、もうかれこれ4、50年ほど前の出来事だから、昨今の実態はさすがにその頃とは違うのだろうと思われるのだが（実は違ってなかったりして…）、給食といえ、それは学校という場所における「平等である」ということの象徴の時間空間だったことを強烈に記憶している。こんな言い方をし始めると、さも難しいことを言い出しそうな雰囲気が出てしまっていて申し訳ないのだが、何のことは無いただ「児童・生徒全員の配膳量が皆同じ」であり、しかもそのことについて、「多くの教師、児童・生徒が疑問を感じていない」という奇妙な事実に関しての疑義を語ってみたいだけなのだ。

学校給食においては、「平等に配膳する」＝「同じ量を配膳する」ということにアブリオリになっている。誰もがそれに大きな疑問を感じないのは、この方法がおそらく日本人の平等感覚にマッチしているからであると思われるのだが、それは例えば一枚の円形のピザを3人で平等に分けましようと言った時に、中心角120°のところを扇形に3等分することがベストの方法であると考えた日本人が圧倒的に多いだろうことを思えば、「平等＝同じ量」ということが、日本人の平等感覚であることが、容易に想像できるだろう。

給食の同量配膳には、同金額の給食費を全児童・生徒から徴収しているのだから、というような財源的な背景もあるのかもしれないことを加味しても、果たして、本当に「平等＝同じ量」なのだろうか？

食事では、「お腹が空いている人もいて、体格がいい人もいて、食べ盛りの人もいて、気持ちが塞いで食欲がない人もいて、嫌いなメニューばかりで食べたくない人もいて、…」そんな時、平等に配膳することとは、同じ量を配膳することなのだろうか？

「一人の支援者が10人の利用者を個別に60分間支援しなければならない時、60分÷10人＝6分ずつ支援することが平等なのだろうか？今日、急に予定されていた面会が中止になって寂しい気持ちで暮っている人がいて、午後の暖かい日差しにちょっと眠気を感じた人がいて、一人で考え事をしたくて、それをだれにも邪魔されたくない人がいて、…」そんな時、平等に支援することとは、同じ時間だけ支援することなのだろうか？

パニックを起こして泣き叫んでいる人に、他の利用者の方を差し置いて、個別に支援を提供することは、平等を逸脱した特別扱いになのだろうか？

さて、問いを立てなおしてみよう。

「調理した食事量も一人の職員が提供することができるサービス量も一定量であり、しかも上限がある。その条件の下で平等に分配することとは何か？」と。

まず分配をする前に、考慮しなければならないことがあります。それは所謂「ニーズの把握」ってやつ。給食の同量配膳、ピザの3等分には、ニーズの把握って思想は無いです。お腹が一杯であろうが、空いていようが、同量分配ですから。そして「ニーズの把握」をしなから、今度は「分配方法の相談」ですよ。お互いの立場を理解しながら、どのように分けるかを相談するわけです。同量分配にはこの「相談」の思想もありません。

一枚のピザを3人で平等に分けると、その大きさは、大きかったり、小さかったり、不揃いで良いのです。あるいは、今は要らないという人もいるでしょう。それで良いのです。皆がそれぞれの事情を理解して、相談した結果であれば。

それぞれが自分の想いを同じように大切にしたい、そう感じることができると、本当の平等だと考えます。

【参考】

「世界一幸福な国デンマークの暮らし方」
千葉忠夫著 PHP 新書